

兵庫が育む ころろ豊かで自立した人づくり

兵庫教育

1 月号
2018 No.803

特集

教訓を活かし未来につなげる防災教育

— 防災意識の向上を図る取組 —



マラソン大会 スタート!

～養父市立養父中学校～



月刊「兵庫教育」
URL:<http://www.hyogo-c.ed.jp/kenshusho/>

発行：兵庫県教育委員会
編集：兵庫県立教育研修所

特集

教訓を活かし未来につなげる防災教育 —防災意識の向上を図る取組—

学校訪問

～つながりの中で 学びの主人公を育てる～
「生きるとは 分かちあうこと」

養父市立養父中学校

巻頭言

未来の創り手を育むために

兵庫県教育委員会 教育次長

せらだしげと
世良田重人

1

論文

防災教育のあり方と課題

兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科 教授

もりなが はや お
森永 速男

4

教育実践

「わがこと意識」
～災害に対し主体的に行動する力を育成する～

姫路市立妻鹿小学校長

はっとり
服部ひづる

8

かけがえのない命を守る防災教育
～防災を通して命の大切さを考える～

三木市立志染中学校長

のぐち ひろし
野口 博史

12

本校における防災の取組

県立柏原高等学校 主幹教諭

くほ てつなり
久保 哲成

16

教諭

なかつか み ゆき
中塚 美幸

教諭

はしもと くのにり
橋本 訓典

授業実践

地域と共に行う防災教育

神戸市立須佐野中学校長

いとう としひろ
伊東 俊浩

24

クラスづくり

子どもの成長を支える教師の関わり

兵庫教育大学大学院 教授

あきみつ けいこ
秋光 恵子

28

1 月 号
イラスト 尼崎市立園田中学校
教諭 深江 恵



ワーク・ライフ・バランス ～生き生きと教壇に立つために～

散策編（丹波市，明石市）

「兵庫教育」編集室 30

連載講座

特別な教育的支援を必要とする児童生徒への指導（第56回）
～中学校から高等学校への支援継続のための引継ぎのガイドラインについて～

県教育委員会事務局 特別支援教育課 32

管理職による随想

『老子』に学んだ教職人生

南あわじ市立倭文中学校長 しょうだ こういち 庄田 孝一 33

寄稿 兵庫教育大学「理論と実践の融合」に関する研究 より

防災・減災に関する児童生徒の思考・判断を促す社会科授業モデルの開発と実践

兵庫教育大学大学院 准教授 やまうち としお 山内 敏男 34

コラム「学校の窓」

コーヒーの時間

神戸大学大学院 教授 わたなべ たかのぶ 渡邊 隆信 40

編集後記

トピックス P20～23

-
- (但馬) 新温泉町立浜坂西小学校
海と生きる 22
 - (播磨東) 高砂市立伊保南小学校
地域でつながり命みつめ 21
 - (播磨西) 赤穂市立御崎幼稚園
みさき・げんキッズ
・チャレンジタイム 22
 - (県立) 県立三田西陵高等学校
実習で学ぶ教育の心 20
 - (丹波) 丹波市立北小学校
すみよい社会をめざして 23
 - (神戸) 神戸市立奥の池幼稚園
みんな仲良し 奥の池っ子 20
 - (阪神) 宝塚市立丸橋小学校
地域をつなぐ自主防災訓練 21
 - (淡路) 淡路市立北淡中学校
ようこそ先輩 23

〈編集企画〉 岡田 未来 岡田 祐典 里 知純 鈴木 正敏
高見 秀樹 村中 利章 県立教育研修所(義務教育研修課, 情報教育研修課)

特 小学校
集
No.1

「わがこと意識」
～災害に対し主体的に
行動する力を育成する～



姫路市立妻鹿小学校

校長 服部 はっとり ひづる

1 はじめに

本校は、姫路市の南東部、播磨灘に注ぐ市川の河口の東側に位置する児童数201名の小規模校である。東には、灘のけんか祭りや神輿の練り合わせが行われる御旅山、北には豊臣秀吉の軍師、黒田官兵衛の居城であった国府山城跡があり、歴史と伝統が息づく地域の中で、今年、開校145年目を迎えている。

播磨灘に接する校区南域は、播磨臨海工業地帯の一部として1960年代以降、広範囲に埋め立てられ、現在では、火力発電所やガスタンクをはじめ、多くの工場や倉庫が立ち並んでいる。

平成26年に兵庫県が実施した、南海トラフ巨大地震津波浸水シミュレーションによれば、校区は、市川を遡上してきた津波により、浸水する場合があると予想されている。

そのため、本校では、突発的に起こる様々な事態に臨機応変に対処できるよう、過去の災害から学ぶことで、「わがこと意識」を徹底させるとともに、「自分の身は自分で守る」児童の育成を念頭におき、防災意識の向上を図る取組をすすめている。

また、本校は、東日本大震災をきっかけに、宮城県石巻市立鹿妻小学校と姉妹校提携し、映像や写真、文書などによる交流活動も行っている。被災地域の児童と直接ふれあうことで、震災の記憶を風化させずに、「わがこと」としてとらえ、多くのことを学んでいる。

2 姉妹校交流

東日本大震災後、テレビで、校名の漢字が本校と逆の石巻市立鹿妻小学校が避難所になっている様子が報道された。そのことから

地域ぐるみでの支援の声が挙がり、平成23年5月23日に鹿妻小学校と姉妹校提携を結んだ。当初は、応援メッセージやビデオレター、学習園で育てたサツマイモや花の種を送ったり、教職員が訪問したりしていたが、ここ数年は、インターネット電話による全校や学年同士の交流を行い、お互いに無理をせず、細くとも長く続けられる交流を行っている。



▲ インターネット電話を使つての交流

昨年度は、2月開催の姫路城マラソンに石巻市の小学生24人が招待された。その中に、鹿妻小学校の児童が4人含まれていたため、本校の6年生が妻鹿小学校と鹿妻小学校の校章を入れた横断幕を作成し、歓迎ムードを盛り上げた。また、有志児童が、一行を出迎えたり一緒に姫路城を訪れたりして交流を深めた。さらに、マラソン大会当日は沿道に横断幕を掲げ、声援を送った。

今年度は、全校で、学校行事などの近況を伝える新聞を作成して鹿妻小学校と交換する取組や、6年生と2年生が教科学習を兼ねて、インターネット電話による交流を行っている。

東日本大震災の発生は、平成23年3月11日。わずか6年前のできごとである。しかし、現



▲ 沿道で応援

在の6年生でさえ、当時は、幼稚園児であったため、よく覚えていないという。昨年度の6年生は、入学時から鹿妻小学校との交流を行ってきたこともあり、地震や津波の被害について、大変、敏感であった。今後ますます震災の記憶が薄れていくが、交流を続けることで、児童に津波による被害や自分の身は自分で守ること等、東日本大震災で得られた教訓を伝えるとともに、被災者に対する思いやりの気持ちも育んでいきたい。また、遠く離れた地域に住む小学生と交流する姉妹校ならではの楽しさも、味わわせていきたい。

- ・ 鹿妻小の人達は、東日本大震災で家族や友達を失ったりして悲しいと思うけど、交流会で少しでも元気になってもらえたらいいと思います。
 - ・ 鹿妻小の人達が元気そうでよかった。6年間交流をしていてよかった。
- (昨年度の6年生の声)

3 本校の防災教育

<目標>

- ・ 災害に対する正しい知識を身につける。
- ・ 災害発生時に適切に判断し、すばやく避難することで自分の身は自分で守るなど、主体的に行動する力を育成する。
- ・ 生命の尊重、助け合いの大切さや共生の心など、人間としての在り方生き方を考えたりする中で、社会に貢献する心等を育成する。

<具体的な取組>

- ①各教科(社会・理科・生活・体育)、総合的な学習の時間、道德の時間、特別活動に組み込む。

- ②防災ウィーク(避難訓練前の1週間)で、「朝の学習」の時間等も活用しながら、集中して行う。

- ③避難訓練やシェイクアウト訓練を計画的に実施する。

4 具体的な取組

【避難訓練】～自分の身は、自分で守る～

避難訓練は、どこの学校でも行っているが、授業中における災害発生を想定したものが多く、教師が児童を先導して避難する訓練が一般的である。教師主導で「おさない・はしらない・しゃべらない・もどらない」を順守して行うことは、避難訓練の基本であるが、災害はいつ発生するかわからない。休憩時間や掃除時間等、校内で児童がバラバラに活動している際に発生する可能性もある。いつ、どんな災害が発生しても、自分の身は自分で守れる力を児童につけさせる必要がある。

しかし、休憩時間等に予告もなく避難訓練を実施しても、混乱することが予想される。そこで本校では児童が災害や避難についての正しい知識を身に付け、とっさの行動がとれるように、目的を変えての避難訓練を年3回行っている。

(※今年度は、兵庫県南海トラフ地震津波一斉避難訓練も行ったため、年4回実施予定)

(1) 津波を想定した地震発生時の避難訓練 (1学期)

<発生想定>

- ・ 授業中、巨大地震が発生。
- ・ 津波の到来が予想される。

<訓練内容>

- ・ 頭を守るシェイクアウトの姿勢で揺れが収まるまで待つ。
- ・ 運動場へ集合した後、御旅山へ避難する。
(1・6年は、ペアで避難)

<指導内容>

- ①教師の指示をよく聞いて、行動する。
- ②「おはしも」の確認。
- ③地震発生時等の避難場所の確認。
 - ・ 妻鹿小学校、姫路市立飾磨高等学校、妻鹿公民館が、指定緊急避難場所である。
- ④津波発生時における市川の危険性
 - ・ 津波が、市川を遡上し、堤防を越えてくる場合がある。



▲ 1・6年のペアで、御旅山へ避難

- ・南海トラフ地震が起こり、市川に海の水が逆流してきても、あわてないようにしたいです。学校にいれば、先生がいるから大丈夫かもしれないけど、家にいたらパニックになってしまうかもしれません。御旅山に逃げることを、忘れないようにしたいです。次の訓練でも、「おはしも」を守り、できるだけ自分で考えて行動したいと思います。1年生と手をつないで御旅山へ登る時は、1年生のことも考えて登りたいです。
(6年女子)
- ・1年生に、「地震や津波が来たら、すぐ、逃げよう」と言ったら、「うん」と言ってくれました。1年生が「おはしも」を守っていたから、ほっとしました。次は、もっと早く避難したいです。
(6年男子)

(2) 火災発生を想定した避難訓練（2学期）

<発生想定>

- ・授業中、給食室で火災が発生。
- ・階段の防火扉が閉まる。

<訓練内容>

- ・教師先導での避難（防火扉の出口をくぐる）
- ・教師は児童誘導以外の役割も確認するため、役割分担に応じて動く。

<指導内容>

- ①「おはしも」の確認。
- ②火災現場での身の守り方。
 - ・校内放送を静かに聞き、発生場所を確認

し、避難経路を自分で考える。

- ・火災の場合、煙を吸うことで命を落とす危険があるため、煙を吸わないように、ハンカチなどを鼻と口に当てて避難する。
- ・煙が充満している場合は、壁伝いに姿勢を低くして歩く。

③消防士の講話

- ・火災に遭遇したら、大声で周りの人に知らせる。

④水消火器を使った消火訓練

- ・ピンの外し方、ホースの持ち方を教わり、3年生以上のクラス代表が火に見立てたカラーコーンをねらって、訓練用の消火器で水をとばす。



▲ 防火扉を通して避難

- ・今回は、いつもと違う避難の仕方をして、本当に火事が起きた時に、こんな風にしたらいいんだと、分かりました。火事が起きた時、あせらずにできると思います。
(5年女子)
- ・今日は、きゅう食室からの火事だったけど、もしかしたら、3年生の教室も火事になるかもしれません。今日は、東かいだんを下りたけど、その時は、西かいだんで下りないといけなないと、思いました。
(3年女子)

(3) 兵庫県南海トラフ地震津波一斉避難訓練（11月1日）

兵庫県内の津波浸水想定区域をもつ市町で、緊急速報メール（エリアメール）が配信され、兵庫県南海トラフ地震津波一斉避難訓練が行われた際、本校でも訓練を行った。

<発生想定>

- ・授業中、南海トラフ地震が発生。
- ・津波の速やかな到来が予想される。

<訓練内容>

- ・揺れが収まるまで、シェイクアウトの姿勢を保つ。
- ・校舎4階の廊下や教室に避難する。

<指導内容>

- ①シェイクアウト姿勢（まず低く、頭を守り、動かない）の確認。
- ②体育館や屋外でもシェイクアウトの姿勢をとる。（体育館では、建物の真ん中で行う）
- ③避難の合言葉「おはしも」の確認。
- ④内陸型地震を想定した避難訓練

（1月17日）

<発生想定>

- ・授業時間外（休憩時間や清掃時間）。
- ・内陸直下型地震が発生。

<訓練内容>

- ・あらかじめ、避難訓練を行う時間を知らせ、その時、自分はどこにいて何をしているのか想像させる。そして、各自で身を守る方法を考えさせるとともに、自分の避難経路を校舎配置図に記載させ、確認させる。
- ・想定した場所に全児童が移動してから、訓練を開始する。

<指導内容>

- ①揺れが収まるまで、頭を守り、シェイクアウトの姿勢を保持する。
- ②遊び道具や掃除道具はそのままにして、避難する。

【防災ウィーク】

～「わがこと意識」を常に持つ～

防災教育の視点として、「わがこと意識」は殊に重要である。姫路は、災害の少ない所だと言われているが、「災害は、忘れた頃にやってくる」と言われる通り、いつ起きるかわからない。災害についての正しい知識や取るべき行動について、定期的に学習を行う必要がある。そこで、避難訓練前の一週間を『防災ウィーク』とし、災害について学び、考える機会を学期に一度ずつ設けている。

<実施内容>

- ・「朝の学習」や昼休み後の「がんばりタイム」（短時間学習）、学級活動の時間に防災教育副読本『明日に生きる』を読み、

災害について知り、災害発生時に正しく判断し、行動できる素地を培う。

- ・1学期・・・地震直後のこと
- 2学期・・・助け合い・復興・その他
- 3学期・・・避難所・復旧・追悼

と、学期ごとにテーマを決め、各学年で学習する題材を分けている。

・自分の命だけでなく、「まわりの人の命も守らない」と、思いました。地しんや火事、つ波、土しゃくずれは、いつ、どこで、おきるかわからないので、お母さんたちがいなくても、自分のみを自分で守れるようになりたいです。（3年女子）

5 おわりに

本校は、この他にも、姫路市立飾磨高等学校健康福祉コースとの小高連携学習で、4年生が「はるかのひまわり」の種を植えたり（注）、災害時の心得や防災袋について学んだりしている。また、各教科においても、体育で、毎年、5・6年生児童が、着衣泳を行い、あおむけになって力を抜いたり、ペットボトルを抱えて浮いたりする学習を行っている。理科や社会では、指導内容と災害を関連付けたり、「道德の時間」では、『明日に生きる』を読み物資料として活用したりしている。

今後も、このように、教育活動全体を通して、児童一人一人が災害に適切に対応する能力を確実に身に付けられるよう、指導の充実を図っていきたい。

注）阪神・淡路大震災由来のひまわりの種「はるかのひまわり」を全国で生育し咲かせる取組



特 中学校
集
No.2

かけがえのない命を守る
防災教育
～防災を通して命の大切さを考える～



三木市立志染中学校
校長 野口 博史

1 はじめに

本校は、東播磨地域、三木市東部の自然に恵まれた環境に位置している。神戸市北区に隣接し、校区南側の丘陵地には、新興住宅地や商業施設が立ち並んでいるが、校区は昔ながらの落ち着いた農村地帯である。また、この地には国指定重要文化財の伽耶院をはじめとし、千体地蔵、御坂サイフォン橋、御坂神社、どっこいさんなどの数多くの観光スポットがある。

一方で、阪神・淡路大震災の後、校区南部の山間部が開発され、兵庫耐震工学研究センター（E-Defence）、兵庫県広域防災センター、兵庫県立三木総合防災公園が完成し、兵庫県の防災の拠点として、県内外から多くの人々が訪れている。

平成28年に70周年を迎えた本校は、現在全校生徒は43名、学級数は各学年1学級、特別支援学級1学級の全4学級で構成される市内で最も生徒数の少ない学校である。地域の人々のほとんどが本校の卒業生であり、本校の教育活動に対する高い関心と多くの支援を受け、生徒は和気あいあいとした雰囲気の中で学校生活を送ることができている。

2 自分たちにできること

平成28年4月、私は本校に着任した。その直後の4月14日夜、続く16日未明に震度7を観測する地震が熊本で発生した。16日は土曜日であったが、午後から参観授業とPTA総会を予定しており、午前中は平常授業を行っていた。

熊本地震の被害の様子はテレビでも放送され、生徒たちも遠く離れた場所での出来事ではあるものの、なんとなく落ち着かない様子だった。そこで急遽、3年生の授業の1時間を、地震について学ぶ内容に変更した。そこで活用したのは兵庫県教育委員会が平成25年度に改訂した「明日に生きる（改訂版）」である。これまでももちろんこの副読本を活用していたが、このタイミングでの学習は子どもたちの心を大きく揺さぶったようだ。

このこともきっかけの一つとなって、生徒たちが動きはじめた。生徒会が中心となって、いろいろなアイデアを出し合いながら「遠く離れていても、自分たちにできることはないか」と考えはじめた。いろいろなアイデアは出るものの、昨年度は全校生徒52名。できることに限りがあると感じた。そこで「地域にも助けてもらおう」と、PTAの協力を得て資源回収の収益金を義援金にする取組を始めた。生徒会が協力依頼のチラシをつくり、6月はじめの週末を利用して全校生で手分けして校区内の全戸に配布した。7月10日の回



▲ 協力依頼のチラシ配布

収日には例年よりかなり多い、全校生徒52名の学校とは思えないほどの量の資源が回収された。

この時のチラシ配布を通して生徒たちは、校区の731戸に敬老会該当者が500名以上（平成29年4月時点で522名）いることなど、地域（近所）にどんな人が住んでいるのかを知ることができた。このことは、いざ災害が起きたときに地域の中で助け合うことにつながる。また、昼間に災害が起こったときに救援活動ができるのは、自分たちしかいないことにも気付いた。

こうして集まった収益金については、三木市社会福祉協議会を訪問し、熊本地震義援金として役立てていただけるよう三木市共同募金委員会にお渡しした。



▲ 三木市共同募金委員会へ

その際、生徒会長は「阪神・淡路大震災を経験した兵庫県民として、少しでも熊本の皆さんのお役に立てれば」と述べた。この生徒たちは阪神・淡路大震災の後に生まれているのだが、彼らの口から、何の打合せもしていないのにこのような言葉が出るのを見て、学校や地域で防災教育を進めていくことの大切さを改めて感じた。

3 語り継ぐ

(1) 創立70周年記念講演

本校は昨年度（平成28年度）創立70周年を迎え、10月28日の文化祭に合わせて記念講演会を行った。講師として群馬大学大学院 理工学部 教授 広域首都圏防災研究センター長

（当時）の片田敏孝先生をお迎えし、「“命を守る防災”を考える」と題した講演を行っていただいた。



▲ 片田先生による講演

片田先生は東日本大震災の8年前から、釜石市の釜石東中学校と鶴住居小学校で津波防災教育に取り組み、その結果、あの大震災時には釜石東中学校の生徒たちが率先して鶴住居小学校の児童とともに避難し、登校していたすべての児童・生徒の命を守ることができた。その時の避難の様子についての詳しい話は今も記憶に新しい。

東北地方に古くから伝わる、「津波てんでんこ」ということばは、決して家族の絆を断ち切れと教えることばではなく、日頃から一人一人が自分の命に責任を持ち、強い絆で結ばれた家族のあり方を伝えるものであることは、先生が常々説かれていたことである。防災を通して命の大切さを、そして親が子どもを思う気持ちを話される頃には、参加していた地域の方々が思わず涙ぐむ場面もあった。講演後には生徒から「中学生がとった行動で、小学生など多数の命を守ることにつながったことを知って、すごいと思った。自分と家族の命を守るためにも、親には、自分は必ず逃げるということを信じてもらうことが大切だ」といったような感想が多く寄せられ、聴く人の心に響く講演会となった。

(2) 石巻の「ど根性ひまわり」

講演会に合わせて、東日本大震災の復興支援ボランティアに取り組んできた三木市在住の方から、宮城県石巻市のがれきの中で花を咲かせた「ど根性ひまわり」の種の寄贈を受けた。

【ど根性ひまわりについて】

「がんばろう!石巻」(看板)の立っている、流されたお店の基礎からひまわりが伸び始め開花しました。このひまわりは、津波によりどこからか流されて来た種が流れ着き、津波にも塩害にも負けず開花したものです。このたくましい姿に勇気をもらいました。そして「ど根性ひまわり」と命名いたしました。(がんばろう!石巻の会HPより)

寄贈を受けた種を平成29年5月末に生徒会の生徒たちが蒔き、夏には立派な花を咲かせた。



▲ 立派に咲いた「ど根性ひまわり」

そして9月にはたくさんの種を収穫することができた。その種を来年度は次の生徒会の生徒たちが蒔き、立派な花を咲かせることで、いつまでも震災を語り継いでいってくれることを期待したい。

4 備える

(1) 実践的な防災訓練

地震の大きな揺れの後、火災が発生した想定で防災訓練を行った。実際の災害時のイメージが湧きやすいようにいくつかの工夫をしてみた。まずは、緊急地震速報のあと、その場で避難行動をとり、その後避難した。

【階段が通れない】

マニュアルに記載している避難経路が通れないことを想定。生徒はここまで来て引き返していた。

【廊下に障害物やガラスが散乱】

棚が転倒していたり、ガラスが割れて散乱

していることを想定。ペットボトルを細かく切って、ガラス片に見立てた。



▲ 障害物やガラス片が散乱

【出火場所に発炎筒】

発炎筒による煙で臨場感を出した。

【負傷者】

自力で動けない負傷者が出たことを想定。近くにいた教師が大声で叫び、助けを求め、担架で運んだ。

他にも集合時、生徒がそろっていないことを想定。1名の生徒にトイレに隠れてもらい、教師が校舎内を探しまわった(防災担当者以外は場所を知らなかった)。これらの工夫をちりばめることで、少しでも実際の災害時をイメージできる仕組みづくりを行い、より実践的な訓練へと進化させていった。

生徒の事後の感想では「今回の防災訓練は、いつも以上に物が散乱していたし、けがをした人などもいて、臨場感があり驚きました。先生が外で、「担架!」と叫ぶのを見て、実際に起こったかのように感じました。地震が起こった日が今日のようないい天気で暑い日だったら、逃げてもその後熱中症などにも気をつけないといけないと思いました」など、訓練に真剣に参加できていたことが読み取れた。

また、例年1.17に合わせて行う防災訓練では、避難訓練に加えて、三木市消防本部の方を講師として招聘し、学年別の訓練も行っている。

【1年生】応急処置法

身近なものを使った止血、骨折などの手当てを学ぶ。

【2年生】消火訓練 搬送訓練

水消火器を使った消火訓練，簡易担架（毛布と棒）作成と徒手搬送を学ぶ。



▲ 簡易担架作成と徒手搬送

【3年生】心配蘇生法

人工呼吸，心配蘇生法・AED使用方法を学ぶ。

(2) 避難所運営ゲーム「HUG」を使った研修

日本防災士会の方を講師として招聘し，避難所運営ゲーム「HUG」を使って，災害時に学校が避難所となったときの避難所運営について学んだ。

避難所運営ゲーム「HUG」というのは，2007年に静岡県危機管理局が企画・開発した防災カードゲームで，避難者の年齢や性別，国籍やそれぞれが抱える事情が書かれたカードを避難所の体育館や教室に見立てた平面図にどれだけ適切に配置できるか，また避難所で起こる様々な出来事にどう対応していくかを模擬体験するゲームである。

日本防災士会から4人に講師としてお越しいただき，本校職員が3班に分かれて研修を



▲ 「HUG」を使った研修

進めた。

避難者の個々の事情を考慮しながら部屋割を考え，炊き出し場や仮設トイレの配置などの生活空間の確保，視察や取材への対応などを通して，話し合いながら避難所の運営を学ぶことができた。しかし，実際に作業を進めていくと，とっさに判断することができない問題に次々と直面した。

大規模災害の発生を想定した訓練を重ねることで，実際に災害に直面した場合も被害の拡大を最小限に食い止められると信じている。

5 おわりに

私自身を振り返ってみると，阪神・淡路大震災の直後は，枕元に懐中電灯と笛を置き，避難袋には最低限の水や食料を詰めていた。しかし，気がつけばいつの間にかその備えをしなくなっていた。そして，東日本大震災の後，思い出したようにまた始めていた。

防災意識を日々の生活の中で継続していくことはなかなか困難である。しかし，災害に対する備えの気持ちを持ち続けることは，自分自身や周囲の人のかけがえのない命を大切にしようという意識につながっていく。先人の知恵や思いがつまった「防災（＝命の）教育」にこれからも真摯に取り組んでいきたい。



特 高等学校 集 No.3

本校における防災の取組



県立柏原高等学校 主幹教諭 久保 哲成



教諭 中塚 美幸



教諭 橋本 訓典

1 はじめに 平成26年8月豪雨

平成26年（2014）8月豪雨とは、平成26年（2014）7月30日から8月26日にかけて日本の広範囲で発生した豪雨について、気象庁が定めた名称である。この豪雨は、丹波市市島町や広島市安佐南区に大規模な土砂災害をもたらした。表1が、丹波市における住家被害の状況である。人的被害は、死者1名、負傷者4名であった。市島町で流出した土砂量は、広島市とほぼ同じ。人的被害が広島市に比べて少なかったため、マスコミ報道はあまり大きくなかったが、丹波市に大きな被害をあたえた災害であった。

この災害が、丹波市の防災への意識をより一層強いものにし、柏原高校における防災への取組を進めていくきっかけとなった。

▼ 表1 丹波市、市島町の住家被害

	住家(戸)						計
	全壊	大規模半壊	半壊	一部損壊			
				一部損壊	床上浸水	床下浸水	
丹波市	18	9	42	1	169	784	1,023
市島町	18	9	39	0	112	351	529
市島町/丹波市(%)	100.0%	100.0%	92.9%	0.0%	66.3%	44.8%	51.7%

(丹波市役所統計より)

(丹波市役所統計より)

2 地域住民参加型の防災への取組

本校では、毎年1学期と2学期の計2回避難訓練を実施している。2回の避難訓練のうち、1学期は地震を、2学期は火事を想定している。平成29年（2017）7月に実施された地震を想定した避難訓練（以下、7月避難防災訓練とする）を紹介する。

本校の7月避難防災訓練には、学校と隣接している丹波市柏原町東奥地区の地域住民が参加する。東奥地区には90世帯、約200人の住民がおり、表2のように、毎年20人前後（世帯数でみると約25%）が訓練に参加している。

7月避難防災訓練では、警備班の教員が避難してきた地域住民を避難場所まで誘導し、生徒会の生徒が避難者の氏名を聞き取り、本部に提出する手順を確認した（写真1）。

▼ 表2 東奥地区参加人数推移

年度	参加人数
平成26年度	25人
平成27年度	14人
平成28年度	18人
平成29年度	18人

東奥地区の地域住民が参加して行われた7月避難防災訓練の成果をまとめていく。

訓練の成果として、①学校として災害発生時に想定される地域住民の受け入れ態勢の確認を行うことができた、②生徒が緊張感をもって避難訓練に臨めた、③地域住民が災害発生時の避難経路や避難の手順などを確認できた、の3点が挙げられる。



▲ 写真1 生徒会による東奥地区参加者の確認

3 探究活動における防災への取組

2年1組、知の探究コースの「探究」の授業（2単位：総合的な学習の時間）で自然防災探究部の生徒が丹波の自然について探究した。以下、その活動を紹介する。

丹波市で起こった平成26年（2014）8月豪雨災害について、丹波市役所復興推進部復興

推進室やNPO法人丹波グリーンパートナーの協力を得て学んだ。

丹波の森を考えることから始まったこの班は、市島町の豪雨災害の実態を知るなかで、班名を自然探究班から自然防災探究班に変え、自然との共存や適切な活用が防災につながることを探究し、丹波市役所復興推進部復興推進室との協働で、看板を作成した。一つは、子どもに対する防災教育の一助となるよう、丹波市豪雨災害の被害状況や復興に向けた取組を示す看板を作った。被害箇所ごとに災害直後と復旧後の様子を写真で比較することができ、山や川で復旧工事がされた所も地図上で示した。説明にはすべてふりがなをつけ、これからも続いていく復興に向けた取組が加えられていくように空欄を設け、シールの着脱ができ、目で見えるだけでなく手を動かして学べるものになっている。被害の大きかった前山地区の小学校近くのコミュニティセンターの壁に設置された（写真2）。



▲ 写真2 被害状況と復興の取組を示す看板

もう一つは、山の崩落による土砂の流失や、倒木が川の流れをせき止め、岸を削り洪水を引き起こす一因だと考え、山の持つ再生能力に期待したものである。山の崩落現場で治山ダムが見渡せる場所に立てられ、地域の人だけではなく地域外の人にも災害と防災の大切さが実感できるものにと考えた（写真3）。

自然防災探究班は1年間のまとめとして、地域の方や、中学生、高校の後輩に向けて探究活動の成果を発表し、人に来てもらえる森にすることを提案した。具体的な案として、①ハイキングやアスレチックコースの設置、森の音楽会など山で遊んでもらい親しみを持ってもらうこと、②大阪や京都から1～2時間の距離である丹波の森に都会から来てもらうこと、③山で働く高齢者は山を通して孫と一緒に遊びたいとの思いがあるとのことから地域内での世代を超えた繋がりを作るための場所にする、④森を多くの人々が訪れ、

人が山に入ることにより、間伐などの手入れが行き届き、地も踏み固められ土砂災害による被害を抑えることができること、以上の4点である。



▲ 写真3 山の再生能力を期待する看板

4 部活動での防災への取組

平成26年（2014）8月豪雨災害を受けて、丹波市内の外国人、幼稚園児、障がい者へのボランティア支援を行っているインターアクト部（ボランティア部）では、社会的弱者の防災意識を高めたいと考えた。日本語の理解が不十分であったり、体力的な不安があったりと、彼らが災害への対処に強い不安を持っていることを知り、防災教育の必要性を感じた。

このような彼らに、効果のある防災教育をどのようなしたら良いかを考えるなかで、誰にでも理解しやすい防災紙芝居（以下、紙芝居とする）の実演を考えた。

紙芝居を作ることを考えているなか、平成28年（2016）4月に熊本地震があり、地震に対する紙芝居の準備を始めた。生徒たちが一から紙芝居を作ることは、時間もかかるので、市販の紙芝居を探した。仲川道子さんの作品で童心社から出版されている地震防災紙芝居『あわてない あわてない』を見つけ、この紙芝居を使用することに決めた。この紙芝居の実演実績を表3より時系列的に見ていく。

(1) 丹波市在住外国人を対象に

日本語の理解が十分でない外国人が、紙芝居の内容が理解できるように台詞を以下のよう編集した。

- ①紙芝居の日本語台詞を、簡単な日本語台詞に直し、その台詞を2回繰り返す。
- ②簡単に直した日本語台詞を各国外国人の母国語へインターネットの翻訳機能を使って翻訳する。
- ③翻訳後、ネイティブの人に内容を確認してもらい、修正し完成させる。

平成28年（2016）6月に「フィリピン人マ

▼ 表3 紙芝居の実演実績一覧

No.	実演時期	実演行事名	実演言語	対象
(1)	平成28年6月	外国人ママのクッキング教室	フィリピン語、日本語	フィリピン人講師
(2)	平成28年10月	丹波市立崇広幼稚園	日本語	幼稚園児
(3)	平成28年12月	丹波市つくし会クリスマス会	日本語	障がい者と家族
(4)	平成29年5月	国際交流プロジェクト「交流の集い」	7か国語(*)	丹波市在住外国人と日本人
(5)	平成29年6月	「ふれあいコンサート」	日本語	障がい者と家族
(6)	平成29年8月	フィリピン・パナイ島の小学校	英語、フィリピン語	フィリピン人小学生と保護者

*：日本語、英語、中国語、韓国語、フィリピン語、ベトナム語、ポルトガル語

マのクッキング教室」を行ったときに、フィリピン人講師の西村ベラさん（三田市在住）に、初めて紙芝居のフィリピン語バージョンを披露した。披露後フィリピン語に翻訳した台詞を点検してもらい、適切な表現に修正してもらった。

ベラさんから、「この防災紙芝居は十分、フィリピンの小学校で活用できる。災害の多いフィリピンで紙芝居の防災教育ができれば災害で命を落とす子どもが少なくなる」との評価をもらい、フィリピンでの実演の機会がないかと考え始めた。

(2) 幼稚園児を対象に

紙芝居の有効性を確かめるために、平成28年（2016）10月、丹波市立崇広幼稚園の園児たちに紙芝居を実演した。園児たちの反応は非常に良いもので、生徒たちも紙芝居の実演に自信を得た。

(3) 丹波市の障がい者のクリスマス会で

平成28年（2016）12月には、丹波市の障がい者とその家族の「つくし会」のクリスマス会で紙芝居を実演した。ここでも「楽しかった。分かりやすかった」と好評だった。

(4) 多言語防災紙芝居の実演

平成29年（2017）5月に丹波市の外国人と日本人の交流を促進する国際交流プロジェクト「交流の集い」が行われ、外国人と日本人が100人以上集まった。この場で多言語紙芝居（地震編）を実演した（写真4）。この時は、日本語、英語、中国語、ベトナム語、ポルトガル語、フィリピン語、韓国語の7か国語に翻訳したものを実演した。外国人の参加者か



▲ 写真4 「交流の集い」での紙芝居実演

ら口々に、「地震の時の対処方法が分かった」と言ってもらった。生徒たちはとても緊張したが、達成感のある活動ができた。

(5) 丹波市・篠山市の障がい者を対象に

(3)での紙芝居の実演を知った障がい者支援団体から依頼を受け、平成29年（2017）6月に行われた丹波市と篠山市の障がい者が集う「ふれあいコンサート」で紙芝居の実演をした（写真5）。200人以上の参加者の前で生徒たちは緊張していたが、わかりやすい口調で紙芝居を実演でき、参加者から良い反応を得た。



▲ 写真5 「ふれあいコンサート」で紙芝居実演

(6) フィリピンの小学校での実演

(1)のベラさんの評価をもらって、生徒がフィリピンで紙芝居ができないかと模索していたときに、久保の知人の中学校教諭（猪名川町立猪名川中学校）が、フィリピン・パナイ島の小学校に青年海外協力隊として派遣されていることを知った。この先生に現地での紙芝居を実演したいと連絡を取り、実演の許可を得た。生徒が現地に行くには、準備期間が短すぎるので、平成29年（2017）8月に久保のみが現地に赴いて、実演することにした。

現地の小学校では児童やその保護者も来校し、参加してくれた。フィリピン語と英語で実演した。結果は好評で、生徒、保護者は口々に「地震が来たら、机の下へ逃げよう」と言っていた（写真6）。

この紙芝居の実演は、紙芝居文化のないフィリピンの先生方に驚きをあたえた。クリスマス先生は、「フィリピンの小学校には防災マ



▲ 写真6 パナイ島の小学校での紙芝居実演

マニュアルはあるが、このような絵を使って、生徒たちに分かり易く伝える方法がない」と言っており、早速、紙芝居を自分の小学校用に改良していくことを検討したいと言ってくれた。この時、クリス先生が指摘した問題点は、フィリピンの小学校では、児童に一人ひとりの机がなく、長机で一緒に勉強しているため、机の下に児童が全員もぐり込めないとのことであった。このように、各国の学校文化が異なるなかで、日本製の紙芝居がそのまま使えるわけではないが、防災教育の教材として有効なことを確認し合えた（写真7）。



▲ 写真7 クリス先生との振返

実施の翌日、パナイ島よりマニラの国際協力機構（JICA）フィリピン事務所に帰り、現地調整員も交えて振返を行った（写真8）。ここでも、防災教育の普及に紙芝居が有効であることを確認し合えた。国際協力機構（JICA）フィリピン事務所が取り組んでいるフィリピンでの防災教育の推進に示唆をあたえられたのではないかと思います。

5 今後の本校での防災の取組

(1) 災害・危機対応マニュアルの見直し。本校の危機対応マニュアルは8年前に作られたもので、見直しの時期に来ている。3年前より各校の災害・危機対応マニュアルを比較、検討していくなかで、写真や図を使用して分かりやすくまとめた県立三木北高等学校



▲ 写真8 JICA フィリピン事務所での振返

の災害・危機対応マニュアルに出会った。このマニュアルをベースに本校に応じた災害・危機対応マニュアルを現在作成している。

(2) 丹波市のハザードマップが平成29年（2017）6月に改定された。このハザードマップを活用した防災教育の授業をLHR等で実施していけるようにする。

(3) 兵庫県県土整備部の「兵庫県CGハザードマップ出前講座」を活用して、生徒の防災意識を高める。

6 おわりに

18歳選挙権が平成28年（2016）6月から実施されるようになり、高校教育の現場では、市民的資質を養うシティズンシップ（市民性）教育の必要性が問われている。このような中で、生徒に、自分の命と共に地域における自分の存在・役割を考えさせる防災教育は生徒に「生きる力」を培う良い機会となると確信している。

また、生徒、教員とも、各自治体が発行しているハザードマップ上で自分の住居の位置を確認してもらいたい。多くの人が、自然災害に遭遇する危険性のある地域で暮らしていることが分かる。自然災害に遭遇することは、他人事ではなく、自分事であることを今一度肝に銘じたい。

＜参考文献＞

河田恵昭（2008）『これからの防災・減災がわかる本』岩波書店 230p

仲川道子（2016）『あわてない あわてない』（いのちを守る防災かみしばい） 童心社

兵庫県立柏原高等学校インターアクト部（2017）

「丹波市在住ニューカマー外国人の日本社会への親近感・信頼感を高める活動と多言語紙芝居による防災教育の推進」

兵庫地理 p127～p133



地域と共に行う防災教育

神戸市立須佐野中学校長 伊東 俊浩

1 はじめに

本校校区は、神戸市兵庫区の南に位置し、最初の兵庫県庁がおかれた地で、神戸市でも古くから開け、その中心であった町である。その後、明治時代に運河が開発され、学校の三方は海と運河で囲まれている。また、先の阪神・淡路大震災では、生徒の人的被害はなかったものの学校は避難所となり、厳しい状況に置かれた。校区は海拔が低く、将来的に発生が予想される南海トラフ地震では、津波の被害を免れないと思われる。そのため本校の防災教育は、高齢化が進む地域において「守られる立場」から「守る立場」への転換点として、「中学生を防災の担い手に！」との要望に応える意味合いも持っている。高い防災意識を身に付けさせるとともに、各家庭・地域へと意識を伝播させていくことができるように地域・関係団体とともに防災教育に取り組んでいる。

2 年間の授業での主な取組

・火災避難訓練Ⅰ（全学年：4月）

須佐野中学校の防災マニュアルに則って、火災を想定した避難訓練を行う。

・防災施設めぐり（1年：5月）

クラスごとに地域を回り、各所に貼られている避難場所・避難所の表記された避難プレートや海拔の表示されたプレートを確認する。また、公園の地下にある100t防火水槽や防災資材倉庫など防災設備、災害時に本部となる防災福祉センターを見学し、消防団、防災福祉コミュニティの方から説明を受ける。

・消防体験（1年：6月）

本校校庭にて、消防署・消防団・防災福祉コミュニティ・企業の協力と指導のもと、消防活動等の体験を行う。

※主なプログラム：起震車体験・バケツリレー・煙体験・消火器訓練・放水訓練・簡易担架体験・簡易トイレ見学・消防車見学



▲ 地域の方々と消防体験



▲ 消防団と放水体験

・消防署による出前授業（2年：6月）

兵庫消防署員が、家庭で火災の起こりやす

い場面を説明し、実際に発火実験を行い、火の怖さを学ぶとともに火災・消火の知識を学ぶ。また、緊急時の「缶詰を使った簡易蠟燭の作り方」を学ぶ。



▲ 消防署員による出前授業

・避難訓練Ⅱ（全学年：11月）

津波警報を想定した避難訓練を行う。1・3年生は校舎4階への垂直避難、2年生は湊川公園（北へ約2.0km）へ水平避難を実施する。

・市民救命士講習Ⅰ

心肺蘇生法講習（1年：11月）

消防署・消防団の協力のもと本物のAEDを用いた心肺蘇生法講習を行う。



▲ AEDを用いた心肺蘇生法講習

・防災ジュニアリーダー証の授与式（1年：11月）

毎年1年生全員が、ここまでの講習の受講の証として地域各団体が参加のもと防災ジュニアリーダー証を授与される。

・シェイクアウト訓練（全学年：1月）

通常授業時に全市シェイクアウト訓練に合わせ全校一斉に机の下に体を入れ、命を守る体制をとる訓練を行う。

・震災を考える授業（全学年：1月）

震災にあった時、避難所での生活は限られた環境の中でのものとなる。その生活の中で大切なことは人と人との助け合いであると考え、共助の心を大切にしていくための授業を行った。各学年でテーマを設け、避難所での困難な生活を想定し、それを解決していく方法を考える。昨年度は、1年生は、防災バッグ作り、2年生は、段ボールを使った避難所体験、3年生は災害時の生活について学んだ。

・市民救命士講習Ⅱ

けがの手当法講習（1年：1月）

11月に行った心肺蘇生法講習と併せて市民救命士の資格取得を目指す。災害や事故などの緊急時のため止血法・包帯法・副木固定法実習を行う。校区にある病院、消防団などの指導のもと実施する。

3 震災関連行事

・震災を考える全校集会（全学年：1月）

毎年、1月17日の震災記念日に合わせ、全校生徒が体育館に集まり、東遊園地の震災復興のシンボルである「希望の灯」から分灯した火で蠟燭を灯し、黙祷を行う。阪神・淡路大震災当時の映像を見た後、「幸せ運べるように」等震災関連の歌を斉唱し、防災学習について各学年より代表者による決意表明を行う。



▲ 震災を考える全校集会

授業実践

・おにぎりプロジェクト（全学年：1月）

各教室で保護者に炊き出しで作っていただいた豚汁と自分たちが家で作ってきたおにぎりを食べ、震災当時に思いをはせ、励まし合い支え合うことの大切さを学習する。



▲ 保護者による炊き出し

4 その他の取組

・被災地への支援・交流（全学年）

毎年のように発生する天災被害に対し、生徒会中心に募金活動を行い、支援先を見つけ直接支援を行う。

<新潟県旧山古志村からの鯉の寄贈>

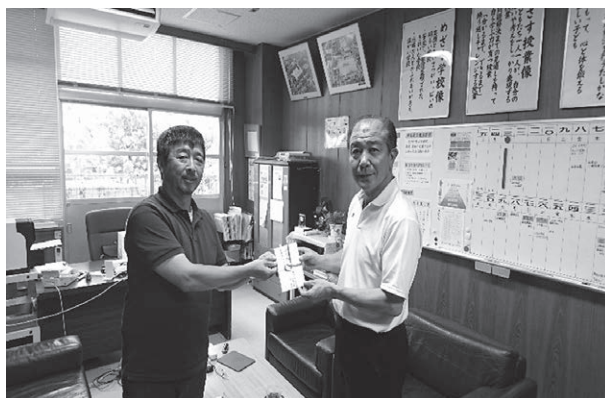
新潟県中越地震から10年を経た記念に平成14年に寄贈された特産の鯉を阪神・淡路大震災で破損した池を改修し、震災のメモリアルとして飼っている。現在も18匹が元気に育っている。

<熊本地震への募金活動>

平成28年に発生した熊本地震に対し、校内における朝の募金活動の実施と、横断幕の作成を行った。生徒会を中心に作成した横断幕には、被災された熊本の方々に向けて、メッセージを書き、被災された阿蘇郡西原村の小・中学校2校に、直接、応援の心を届けた。

<九州北部豪雨災害への募金活動>

平成29年7月に発生した九州北部豪雨災害に対し、校内の募金活動だけでなく、校区内で行われた夏祭りでも地域にも働きかけ、集まったお金を朝倉市内の小・中学校3校に直接届けた。



▲ 朝倉市の小中学校への寄付

・兵庫区「心の絆」プロジェクト（全学年選抜：8月）

平成28年度より、兵庫区役所をはじめとする各関係機関からの支援のもと兵庫区5中学校から生徒を募集し、宮城県仙台市・石巻市を訪問し、現地中学校との交流や避難所の慰問を通して東日本大震災から復興を目指す現地の方を励ますとともに最先端の防災を学んでいる。今年度は、各校3名、教員の代表、PTAの代表を含め、21名が参加した。



▲ 兵庫区心の絆プロジェクト

・神戸マラソン横断幕作り・沿道応援

（生徒会・ボランティア：11月）

今年度で第7回をむかえた神戸マラソンは、大会テーマに「感謝と友情」を掲げている。その根底にあるのは、阪神・淡路大震災からの復興、そして現在にいたるまで「手を差し伸べていただいた国内外の人々や地域へ感謝の気持ち」を表明する大会にしたいという思いである。本校校区が神戸マラソンのコースとなっており、毎年、生徒ボランティ

アにより市民ランナーを勇気づけるための横断幕を製作し、沿道から市民ランナーに熱い声援を送っている。



▲ 神戸マラソン沿道応援

5 減災教育研修から学んだもの

昨年9月に岩手県一宮市・宮城県気仙沼市で開催された「減災教育プロジェクト」という研修会に2泊3日で参加した。内容は、東日本大震災の被災地域への訪問を通して大震災からの学びを各地の学校での減災教育に生かしていくための教員向けの研修である。

そこでは、様々な課題を自らの課題として捉え、一人一人が自分にできることを考え実践していくことを身に付け、問題解決につながる価値観や行動を生み出し、持続可能な社会を生み出すというESDという考えをもとにしていた。このESDの考え方は、様々な課題に当てはめることができるが、防災・減災教育に当てはめるとより効果的であることを学んだ。また、新学習指導要領で育成すべき資質能力とも合致する。それでは、防災教育や減災教育を通して生徒にどのような力を身に付けさせる必要があるのか整理する。

- ①災害が起こる前にしておかなければならないことを考える
- ②災害時どのような行動基準に基づいて行動するのかを考える
- ③災害の後に必要なことについての準備や知識・技能を考える

以上のことを生徒自身が考え、学習し実践力を身に付ける必要があり、そのための学習が求められている。

6 最後に

本校では、年間を通して様々な取組を行っている。その内容は多岐にわたり、生徒は多くの体験をしている。しかし、先に述べたように本当に自分自身の行動基準となる知識や技能が身についているかという疑問が残る。東北での研修を通して本校の防災教育の課題が見えてきた。

- ①自分の身を守るための知識や技能、判断力と行動力を具体的な課題解決や反復練習により身に付ける
- ②家族や友人、地域の人たちとより深く連携するため、コミュニケーション能力を高めボランティア活動等を通して協働する力を身に付ける
- ③学校の内外を問わず、災害の前、災害時、災害後に起こりうる様々な事象について知識を深め行動の指針を身に付けておく

災害は、いつどこで起こるかわからない。学校と家以外でも起こりうる。そんな時どのように行動するべきか。ひとつ判断を間違えると命を失いかねない。実際に東北に行ってみて、現地の中学生の意識の高さや防災学習による実践力は本校のそれとは比べ物にならないほど高い。それは生徒本人が実際に大震災を経験したかどうかの差である。

神戸は震災を経験した街であり、二十数年にわたり防災教育に力を入れてきた実績がある。これまでの教育実践に加え、さらに改善し、生徒の命を守るための教育としたい。同様にわれわれ教員は、避難所経営から背を向けることはできないであろう。自らの命を守るのはもちろんのことであるが災害に備え、大人として、教員としての役割を十分に身に付け、準備しておくことが必要である。